
RIKU

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RIKU

【Nコード】

N6770G

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

借金の返済の替わりに金貸しから奇妙なバイトを依頼され困惑する玉城^{たまき}。その日は彼は不思議な青年「リク」と出会う。「嘘」と『本当』、『現実』と『非現実』のボーダーライン。出会ってしまった二人の青年の少し切ないミステリー。事情によりタイトルを変更いたしました。

第1話 出会い

それはまるで、見つめていると風の音が聞こえてきそうな、神秘的な少女の絵だった。

信号待ちの間、何気なく視線を移した画廊の中にその絵を見つけ、
玉城はブレイキの効きにくい自転車^{たまき}を足で止めながら暫し心を奪われた。

日だまりのような淡く光るワンピース、空気に溶けてしまいそうな白い肌、黒い瞳、亜麻色の髪。

街の喧噪も消えていくような気がした。

けれど今の彼は悠長に絵を眺めていられるような状況ではない。

街金に借りたお金の返済期日は今日まで。

50万という金額は、収入が不安定なフリーライターの玉城には、かなりな大金だ。

もちろん無計画に借りたわけではなかったが、当初の予定だった仕事にキャンセルが入り、まるきり返済計画が狂ってしまったのだ。街金と言ってもヤクザではない。頼み込めば何とかなるだろうと、根の真面目な彼はガタの来た自転車を祈る思いで走らせた。

「はあ？ あと2週間待てとおっしゃいましたか？」

薄暗い店舗内で坊主頭の従業員が玉城を見据え、引きつるように笑った。

『グリーンライフローン』。爽やかなのは借す時の接客と、名前ばかりなのか？

玉城の笑顔も引きつった。

「すみません、それまでには原稿料が入ってくるはずなんです。半分は返せると思うんです」

・・・思えば、あの詐欺に合ってなければこんなところで金なんか借りなくて済んだ。

玉城は一ヶ月前に起きた災難を腹立たしげに思い出していた。

『当たり屋』なんてものが本当に存在するなんて、まして自分が被害に遭うなんて思っても見なかった。

仕事仲間に車を借りて取材先まで行く途中の路地で、その当たり屋は車の前に飛び出してきたのだ。

その中年男は、緩いスピードで徐行していた玉城の車の前でひと跳ねした後ごろんと寝転び、役者顔負けの演技で被害者を装った。

瞬間、目の前の出来事に玉城はパニックになり、飛び出すや否や、男を抱き起し、ひたすら謝った。

「ああ、何とか大丈夫です、かすり傷ですから。どうでしょうね、示談と言うことにしませんか？ 免停にならなくてすむでしょう？」

「おや、あなたの車では無い？ それなら尚のこと、面倒は避けた方がいいんじゃないですか？」

ただ謝るばかりの玉城にその男は優しい笑顔でそう言った。
50万という金額を提示して。

それが詐欺だとわかったのは金を渡した後だった。

あんなに簡単に人は騙されてしまうものなのだ。玉城は改めて思い知った。

「半分って言いました？ 残った半分にまた利子が付いて膨らみますが、分かって言ってますか？」

坊主頭は更にグイと玉城に顔を近づけた。

かろつじて敬語だが、顔はどう見ても威圧していると思えない。玉城の端正な顔が次第に青ざめていく。

「そこをなんとか・・・」

「なんともできませんね、お客さん。こっちも信用して貸してんですよ。リスクしょって。そっちも誠意見せてもらわないと。なんなら体で払って貰いましょうか？」

もう敬語の意味がわからない。そして冗談にしては質が悪すぎる。血の気の引いた頭で玉城は絶望的にうなだれた。八方ふさがりだ。

「ねえ、そのあなた。もし良ければ、その借金と引き替えに一つバイトを引き受けて貰えないでしょうかね」

突然しわがれた声が店のパーティーシヨンの後ろから聞こえてきた。

「小宮社長・・・」

坊主頭が声の方向を振り返る。

パーティーシヨンの後ろから出てきたのは、白髪交じりの頭に白い口ひげの男。社長の小宮だった。

社長、というより、「小宮老人」と言った方が近い。

年齢不詳だが、白い髭のせいで老人に見える。

「どうですか？玉城さん」

小宮老人は顎髭を触りながら、玉城にニツコリと笑いかけた。

薄雲が切れて、少し青空が顔を覗かせた。

玉城は来た道をまたボロ自転車に乗って滑走する。

最悪の事態は免れた。けれどもあの金貸しの老人のバイトとは何なのか不安だった。

後日また連絡するからと携帯番号を教えさせられた。

断る理由も権利も無いことは分かっていたが、やはり不安がつる。確かに従業員はあの坊主頭と事務員くらいしか見あたらなかったが、なぜ自分に仕事を振るのだろう。

しかも50万の借金を帳消しにするという好条件で。

考えれば考えるほど不安が押し寄せる。

今は考えないでおこう。もしやバイバイだったらそのときっぱり断ればいいんだ。

玉城は自分に言い聞かせ、気合いを入れるようにハンドルをギュッと握り直して公園へ続く路地を右折した。
その時。

「たっつ！！！！ あっ・・・！」

いきなり人影が飛び出してきた。

すんでの所でブレーキをかけたが年期の入ったボロ自転車だ。
大きな音と共にチェーンが外れ、ブレーキハンドルはいきなり何の抵抗もしなくなる。

思い切り足で踏ん張り止めようと試みるが、逆にバランスを失った自転車はその人影と鈍い音を立ててぶつかった後、飛び降りた玉城から5メートル先まで走り、街灯に衝突して沈黙した。

玉城の心臓は破裂するのではないかと思うほど激しく鼓動した。
男が倒れている。

自分がぶつけてしまった。

玉城はガクガクする足でうつぶせに倒れている男に走り寄った。

「だ・・・大丈夫ですか！？ あん・・・あんの・・・」

すっかり取り乱し、その男の肩を掴みガシガシゆすった。

「いつ・・・いたい。・・・痛い、イタイ・・・！」

突然スイッチの入ったオモチャのようにその男は右手首を押さえてうめき声をあげた。

「よかった！ 生きてる！」

思わず安堵の声をあげる玉城。

「良かったって・・・ひどいな。痛いつて言ってるだろ」

ガバッと上半身を起こし、その男は不機嫌そうにグイと顔を上げる

と、玉城を睨んだ。

「あつ・・・ごつ、ごめんなさい！ 本当にすいませんでした。僕の不注意で・・・。怪我しませんでしたか？」

とにかく青ざめながら玉城は必死で男に謝った。

自分が人に怪我をさせてしまうなんて事は、彼の穏やかな人生の中に無かったことなのだ。もちろん、あの当たり屋の事故は論外だ。

その男は、そんな様子の玉城をしばらくじっと見ていたが、やがて少し笑いながらポツリと言った。

「君さあ、簡単に謝っちゃダメだよ」

「・・・えっ？」

玉城は伏せていた顔を上げ、改めてその男を見つめた。

ブルー系のチエックのシャツにジーンズ。ゆるくウエーブした柔らかそうな栗色の髪。ほっそりとした顔立ちに美しいラインを描く大きな目。あたりの光を映し込んだ色素の薄い琥珀色の瞳は、痛みのためか少し潤んでいる。

男の自分でもドキリとするほど、その男は中性的で魅力的な容姿をしていた。

まだどこか幼さが感じられるが、自分と同じ20代半ばくらいだろうかと玉城は思った。

「もし僕がタチの悪い人間だったらお金、巻き上げられてるよ。あのね、すぐに謝っちゃダメ」

そう言つて男はニコツと笑った。

「は・・・はい」

その穏やかな笑顔に救われた気持ちになって玉城は思わず微笑み返した。

「でも、どうしようかな。・・・手首痛めちゃったみたい」

男の言葉に再び玉城はその笑顔を凍らせた。

「そ、そうなんですか？」

「うん、しばらく仕事できなくなるな」

「えええーっ。仕事、何されてるんですか？」

「しごと？・・・ピアノスト」

「ピ・・・。大変じゃないですかっ！　すぐ病院行きましょう！」

「病院ねえ・・・」

そう言いかけて男は“ハッ”と自分が来た方向を振り返った。

玉城もつられて振り返る。

その視線の先には小さな公園。

綺麗に並んだツツジの木の横をスーツ姿でこちらに走って来る女が見えた。

美人の類には入るが、その表情はあまり穏やかではない。明らかに怒りに燃えている。

そして、でかい。

太っているというよりも筋肉質で、まるで女子バレー選手とレスリングの選手を合わせたような巨体だ。

「ねえ、お願い！」

その男は少し真顔になり、左手で玉城の腕を掴んできた。

「お詫びとか病院とか、もういいからさ、ちょっとお願い聞いてもらえる？」

男は声を潜めて早口にしゃべりかけてくる。

「なんです？」

「僕の恋人のふりをして欲しい」

「・・・は？」

一瞬意味が分からなかった。

「ね、今だけ」

「僕、男ですよ？」

「見りや分かるよ。やるの？ やらないの？」

「やつ、・・・やります！」

訳の分からないまま勢いに押されてそう言い、玉城は男に促され、立ち上がった。

男は玉城よりも少し背が低かった。体つきは玉城よりもスラリとしている。

玉城の右側に体を寄せて並び、玉城の腕をぐっと掴んで引き寄せる。

“ ということ？ いったい何？”

男にしっかりと腕を掴まれて寄り添われ茫然としている間に、さっきの大女はすでに息を切らせながら玉城達の前に立ちはだかった。

「リク！」

長い髪を後ろで束ね、きつちりとしたベージュのスーツに身を包んだキャリアウーマン風のその大女は、そう叫ぶとキッと玉城の横のその男を睨みつけた。

玉城は動くことも出来ず、ただ金縛りに合ったように立ちつくした。

第2話 白い家

玉城には表情は見えなかったが、横で確かに男は軽くフツと笑った。

「ね。言っただ通りでしょ？この人がそう」

そう言っただけ男は玉城の腕をさらに引き寄せる。

次の瞬間女は鬼のような顔つきで玉城を睨みつけた。

「ひっ……」

背筋が凍るような感じがして、玉城はビクリと震え上がる。

女はもう一度男に視線を戻すと、手を腰に当てて仁王立ちになりながら、

「最低！」

と、言い放った。

男がすぐ横でもう一度ニヤリとしたのが分かった。

女はクルリと向きを変えると、もう何も言わず、振り向きもせず、ズンズンと来た道を帰っていった。

「いったい、どういうこと？」

女が遙か向こうに行ってしまうと玉城は、横の男の腕を逆に掴みなおした。

男は迷惑そうにその腕を振り払うと、少し疲れたような笑顔を作った。

「女って怖いよね。もうずっとあんな感じで追いかけててね。まるでストーカーだもん。あんな形相で追いかけられたら怖いでしょ？逃げるよね？」

男の恋人がいるって言ったら、あきらめるかなって思ってた

「え、そうなんですか？なんかキヤリアウーマン風で、そんな感じには見えなかったけど」

「・・・信じないならいいよ」

男は少しすねたような表情をして体のホコリをはらうと、
フイと背を向けて数十メートル手前に落としてきた荷物を拾いに戻った。

「あ、ごめんなさい。信じてないとかじゃないですから！」
慌てて取り繕う玉城。どうやら気むずかしい男らしい。

男は不機嫌そうに公園の土の上に置き去りにされていた四角く厚みのある荷物を
右手で持ち上げようとした。

けれど一瞬顔を歪ませてその荷物をまた土の上に落としてしまった。

ハツとして走り寄る玉城。

「大丈夫？もしかして手、痛むんじゃないよ・・・」

「痛くなんかないよ」少しすねた声。

「いや、絶対痛めたんだ。僕のせいです！と、とりあえず家まで送ります。家どこですか？」

「僕、男に興味ないよ？」

「何の話をしてるんですか！とにかく送ります。送りますって言っても車は無いんですが」

玉城は遠くで果てている自転車をチラリと見た。

男もその視線を追って自転車を見た。そしてクスリと笑う。

「・・・じゃ、家、すぐそこだから荷物だけ運んでもらおうかな」
根負けしたように男は小さく了解した。

とにかく大事に至らなくて良かった。

そう安心しながら玉城はその荷物をスクラップ寸前の自転車の荷台に乗せた。

かなり大きな平べったい箱なのでずり落ちそうになるが、男がそれを左手で押さえてくれたので

玉城はそのまま自転車を押して歩き出した。

公園を抜けて筋を一步入ったとたん大通りの喧噪から離れ、緑の木々が綺麗に植えられた閑静な住宅街が広がっていた。

小鳥の声さえ聞こえる、不思議な、懐かしい景色。

「もし後で体調とか悪くなったら連絡してくださいね。番号教えますから。」

あ、僕はタマキと言います。丸い玉の玉に、城」

「たまき・・・？じゃあ、玉ちゃんだ」

「・・・いや、そう呼ばれたことないけど。ま、まあ、何でもいいです。ええと、あなたは・・・」

「僕？」

「リク・・・リクさんでしょ？あ、下の名前か。ごめんなさい」

「うん、リクでいいよ。敬語もいらない。同じ年くらいでしょ？」

「あ・・・はい、了解」玉城は笑った。

気難しいのかと思ったが、けっこう人なつっこい。

よく分からない男だと玉城は思った。だが不思議と嫌な感じはしない。

とにかくぶつけた相手が前のような詐欺師でなくて良かったと思った。

心地よい木漏れ日の中、元々お喋りな玉城は何となく自分の仕事の

話や世間話をしながら歩いた。

リクは相づちを打ちながら楽しそうに聞いている。本当に心地よい場所だった。静かで綺麗な住宅街。

しばらく歩くと角地の狭い公園の横に今時めずらしい平屋の小さな木造の家が見えてきた。

その前でリクは足を止めた。

洋風な造りではあったが、時代からポツンと置き去りにされたような寂れた家。

いかにも手作りという感じで塗られた白いペンキは所々剥げかかっている。

「・・・レトロだね」

玉城は遠慮がちに言った。

「古い家でしょ？家って言うより小屋って感じだよ。昔は雑貨屋の店舗だったらしいよ。

今、大家さんに取りあえず借りてるんだ。どうせちよくちよく引越しちゃうから。

あ、土足でいいからね」

リクはそう言うのと年期の入った真鍮のドアノブをまわして中に入った。

“そうか、ピアノを弾くにはこんな一軒家の方がいいのか”

そう思いながら中に入ると、そこはガランとしたフローリングの部屋だった。

奥にキッチンと、隣の部屋に続くドアが一つ。

あとはパイン材のテーブルと椅子と棚以外、本当に何も無い。

けれど何か変わった臭いがする。

何か懐かしいような、落ち着くような、だがピンと来ない。

「ピアノが置いてあると思ったんだけど、何もないんだね」玉城は素直に感想を言った。

「ピアノ？なんでピアノ？」きょんととして聞くリク。

「え？だってピアノリストだって・・・」

「そう？」

リクは曖昧に笑った。

「ピアノなんて弾いたこともないよ」

「へ？あれ？聞き間違いかな？」

「きつとそうだよ？」

可笑しそうに笑うリクに何となく恥ずかしそうに笑い返して玉城は抱えていた大きな荷物を壁際に置いた。

「じゃあ、何やってる人？一力所にいられない仕事？」

玉城がそう聞いた瞬間。

まるで小動物が何か物音に反応して耳をピンと立てる時のようにリクは視線だけ動かして一瞬体を強ばらせた。

「どうかした？」

玉城がそう言うのとリクは視線を玉城にもどして何もなかったように表情を柔らかくした。

「ううん、なんでもない。ごめんね、ありがとう。」

荷物持つて貰って助かったよ。何もお礼出来なくて悪いけど」

「あ・・・いや、とんでもない。こちらこそ」

急に締め挨拶をされて焦る玉城。

「あの、電話番号書いておくから本当、何かあったらそっちに連絡

してね。

こういう事故は後でどうか痛くなったりするんだから」

玉城は持っていたレシートの裏に番号を走り書きすると側にあったテーブルの上に置いた。

「いいよ、ここ電話ないし、携帯も持たない主義だから」

「そうなの？」

「うん、どうもありがとう。じゃあ、これで」

そう言われてしまっではもう帰るしかなかった。

これでいいんだろうかと思いつつ玉城はその家を後にした。

・・・かなり激しくぶつかった。本当に怪我は大丈夫なんだろうか。携帯も電話も持たないで今の時代、仕事ができるんだろうか。いったい何をしてる人なんだろう。・・・

玉城は昔からいろんな物事や人に興味を向けて迷走し追求するくせがあった。

ついつい、いろいろ詮索してしまう。

昔付き合っていた女性にも「鬱陶しいからあれこれ詮索しないで」とよく言われた。

改めようと思うが、なかなか癖はなおらない。

家の前に止めてあったボロ自転車を押し、歩き出す。

運良く粗大ゴミ置き場に通りかかり、他の自転車の横にそっと自分のを置いてきた。

あのまま押していたら何時間かかるか分からないところだった。

何故だろう、あの家を出たあたりから頭が痛い。

風邪のひき始めなのだろうか。

そんな事を思っていると携帯のバイブが唸った。

出版社からの電話かと思って表示を見たが、違った。
がっかりして電話に出る。

「やあ、玉城さん。バイトの内容が固まったから明日にでも来てくれませんか？」

小宮からだった。

借金の代償のバイトなんて……。自分も廃車寸前だな。
溜息をつきながら玉城は「はい」と小さく返事をした。

第3話 依頼

「え・・・この絵ですか？」

玉城は小宮が出してきた油絵を見て驚いた。

目の前にあるのはちょうど昨日画廊の店舗を覗き込んだ時に見た少女の絵だった。

光に溶けそうな日だまり色のワンピースを着て、何か語りかけたそうなの、

憂いを帯びた目をして林の中にたたずんでいる。

「この絵、昨日見ましたよ。すぐその画廊で」

興奮気味に言う玉城に、小宮は悲しそうな笑顔を浮かべて頷いた。

「私はこの絵を見た時震えが来るくらい驚きましたよ。やっと今日手に入れたんです。

なんでも人気な画家の絵らしくて画廊の主人は随分売るのを渋ってましてね」

「え・・・この絵がどうかしたんですか？」

玉城の質問に小宮は少し声のトーンを落として話し始めた。

「この絵に描かれている女の子なんです、私の古い友人の孫娘にそっくりなんです。

その子は一年前に家出したんですが・・・」

「家出ですか？」

「そう。それはもう友人は心配してましてね。私も何か協力出来ないかと思ってたんです。

そこにこの絵でしょう？」

「でも、他人のそら似かも知れませんか？」

「そうです。その可能性もあるから内密に調べたいんですよ。あなたにはこの絵を描いた人物の居場所を捜してほしい」

「え？ 捜す？ だって、画廊のオーナーに聞いたらいじやないですか」

「それがまるつきり教えてくれないんですよ。カタブツで。

住所は個人情報なのであまりしつこくは聞く訳にもいかないし。

ただ、近いうちにまた絵を持ってきてくれるはずだということなので、

その時がチャンスかと思うんですよ」

玉城は絵を改めてじっと見つめた。

絵の右下には小さく簡略化したアルファベットのサインがある。かろうじて「MISAKI」と読みとれた。

「僕に画廊をずっと見張れと？」

「借金帳消しですが、嫌ですか？」

「やらせていただきます！」

「ありがとう」

小宮は人の良さそうな顔でニコリと笑った。

「と、いうことは、この絵の作者がもしかしたらその女の子を知っているか、

かくまってるかも知れないということですね？」

「そうなんです。ああ、玉城さん、この問題はデリケートですので絶対他言はしないでください。

そして、突き止めたらすぐに私に連絡をください。決して自分から話しかけたりしないでくださいね。

あなたに何かあったら大変だから」

「わかりました！」

小宮老人の気遣いに玉城は嬉しくなった。

そしてこれはかなり真つ当な人助けなバイトではないか。

玉城はもう一度その少女の絵をじっと見つめ、胸をなで下ろした。

小宮の事務所を出ると、取りあえず玉城はあの画廊へ向かった。事務所からタクシーで5分と言ったところだろうか。もちろん、歩いたが。

小宮の依頼を反芻してみる。やはり自分はあの画廊を常に見張っておかなければならないらしい。

今すぐ貼り付く必要も無さそうだが。

金は無いが時間と負い目はある。まったく自分は打ってつけの人材なのだと思つた。

画廊へ向かう歩道を歩いていた玉城はふと足を止めた。

リクとぶつかった曲がり角だ。

そういえば、彼はどうしているだろう。

サラリーマン風では無かったが、どこかに勤めているはずだ。

もしどこか痛めていたとしたら仕事に差し支えるのではないだろうか。

幸か不幸か、時間はたっぷりあつた。

玉城はくるりと角を曲がつて、あの家の方角へ歩き出した。

何故だろう。気持ちが落ち着いていく。

そこへ続く道は不思議といつもシンとしている。

公園を過ぎたあたりからケヤキの並木が続き、心地よい風がそよぎ出す。

木漏れ日を浴びながら進むと、あの古い一軒家がポツリと現れた。今気がついたがドアホンがない。

ドアの横に木枠の窓があるが、カーテンもブラインドもかかっていなかった。

覗いてもいいのだろうか。少し躊躇してみたが、玉城はそろりと中を覗いてみた。

彼はいた。

斜め後方からなので表情は見えなかったがテーブルの前で果物ナイフを握り、ボーッとしている。

テーブルの上には青いリンゴが1つ。

しばらくじっとしていたが、何となく渋々と言った感じでリンゴを手にとると、

右手に持っていたナイフでゆっくり皮をむき始めた。

けれどすぐに彼はそのナイフを足元に落としてしまった。

“あ……！”

玉城は居ても立ってもいられなくなり、素早く玄関ドアに回り慌ただしくノックした。

けれどシンとして何の反応もない。聞こえないはずはないのに。再びトントントンと慌ただしくノックする。

「こんにちは！新聞屋です！」と、わざとらしく大声で言ってみた。

今度はガチャリとドアが開く。

ドアにもたれかかるようにしてリクが顔を覗かせた。まったく無表情だ。

「間に合ってます」

「サービスしますから」

そう言うと玉城はリクの横をすり抜けて勝手に中に入り込んだ。土足でいいというこの家の造りが「壁」を感じさせない要因なのかも知れない。

玉城は自分でも不思議なほど当然と言った感じでテーブルに近づくとリングを手に取り、ナイフで皮をむき始めた。

少し呆気にとられて玉城を見ているリク。

玉城は作業を続けながらチラリとリクを見た。

「手、痛むんでしょ？俺、連絡先、渡したよね」

「なんともないよ」

「そんなとこで何でウソつくの」

「・・・」

リクは少しムツとした表情で玉城をじつと見た。

「俺だって医者に連れて行くくらい金はあるよ。まあ、今のところ仕事、干されてるけど」

あ、手を洗ってない。そんなことを思いつつ、玉城はガシガシ作業をつづける。

「フリーライターさんだっけ。玉ちゃんは」

少し根負けした感じでリクはテーブルから離れたところに置いてあった椅子に座ると、玉城に聞いた。

「はは・・・。横文字だと格好いいように聞こえるね」

玉城は力なく笑った。リクも少しだけ笑い、じつと玉城の手元を見

ている。

「ねえ、玉ちゃん」

「え？」

「ものすごく、不器用だね」

「え？」

玉城は改めて自分の剥いているリンゴを見た。

剥かれたというより、削られたと言った方がいいそのリンゴは何かの彫刻のように凹凸だらけだった。

「いいんだよ。男はこんな感じで！」

「いいのかなあ」

「細かいなあ、男のくせに」

玉城は少しムツとしたように何とか剥き終わったゴツゴツのリンゴをリクに差し出した。

「ほい。むけた」

「・・・ありがとう。食べていいよ。僕リンゴ好きじゃないんだ」
当たり前のような顔でリクは言う。

「はあ？好きじゃないのに何でリンゴ剥くんだよ！」

「剥いたのは玉ちゃんだよ」

「リクが剥こうとしてたから剥いたんだろ？」

「だから、ありがとうって言ったじゃない」

何でそんなこと言うの？とでも言いたそうにリクはクルリとした目を玉城に向ける。

「ダーーーーーッ！ わっからねえー！」

玉城は片手で頭をガシガシ掻きながら腹立ち紛れにリンゴにかじり付いた。

けれど髪に触った手がベトベトなのに気付くと、また腹立たしそうにジーンズで拭う。

リクはそんな様子を見て可笑しそうにクスクス笑うとキッチンに入
って行った。

ハンドタオルを水で濡らすとまだ手をこすっていた玉城の所に戻っ
てきて手渡した。

「・・・どうも」

なぜだか調子が狂う。

玉城はなんだか妙な気分になってきてゆっくりとパイン材の椅子に
腰掛けた。

「俺はここで何をしてんだろうな」

リングの残骸を片づけながら、呆れたような顔でリクが答える。

「それは僕が聞きたいよ」

「・・・そりゃそうだ」

自分の言ったことが可笑しくて玉城はクスクスと笑った。

椅子に座ったまま何となく部屋を見渡す。

昨日来たときの臭いはもうしない。

必要最低限の生活用品しかないリビングダイニング。

生活感のない部屋。

生活感のない住人。

「リクは何の仕事をしてるの？」

キッチンに引っ込んでたリクがひょいと顔を出す。

「ぼく？」

「うん。こんな昼間に家にいるからサラリーマンじゃないんだろ？」

リクは愛嬌のある目をくるりと動かし、一瞬何かを考えるような仕草をしたあと

玉城を見て答えた。

「フォトグラフィアー」

「え？ そうなの？ それじゃあ形態が俺と似てるね。

やっぱフリーで何処かの出版社と契約したりしてるんでしょ？ それとも事務所に登録とか？

どっちにしても厳しいよねえ。俺なんか連載もの担当してたのにその週刊誌ごと廃刊になっちゃって。

あれはないよね。予定してたスケジュールがズッポシ空いちゃって・・・」

ふと気がつくときリクは窓の外をボーッと見ている。
人の話など、まるで聞いていない。

「・・・ねえ」

玉城が小さく言うと、リクはゆっくり振り向く。

「え？ 何？」

「いや、何って事はないんだけど」

どうも、すべてがしっくり来ない。

話をしていても噛み合わない。

本気なのかジョーダンなのか、まるで分からない。

もし仕事でこんな男の取材を任されたらお手上げかもしれない。そう思った。

「急にお邪魔して悪かった。どっか具合悪いとこ出てきたら、俺ちやんと責任とるから連絡してね」

少し事務的に言うと玉城は椅子から立ち上がり、玄関ドアまで歩いた。

「帰るの？」

後ろからリクの声。

気のせいかなにかに怯えているように聞こえる。

玉城は振り返った。

「え？」

「・・・なんでもない。心配してくれてありがとう」

気のせいだったのだろう。

リクは普通にニコツと笑った。そして

「玉ちゃん、いい人だね」と、付け加えた。

玉城は思わず笑い出した。男に言われてもちつとも嬉しくない。

「俺の不注意だからね、当然の対応でしょ。この近くで仕事してるからまた顔出すよ」

玉城はそれだけ言つとその家を後にした。

仕事・・・か。まあ、仕事には違いない。自嘲気味に笑った。

“けれど、リク。あいつの仕事はたぶんフォトグラファーなんかじゃないな。”

玉城はそう思った。カンだが、間違いない。

何のためのウソなのか分からなかった。

仕事を教えたくないのならそう言えばいい。単にそう言う癖なのだろうか。

本当によく分からない男だ。

やわらかい木漏れ日の中を、そんな取り留めもないことを考えながら玉城は来た道を歩いた。

大通りに出るともうそこは一瞬にして喧噪にまみれた慌ただしい日常の世界だった。

世知辛く、厳しく、よそよそしいの現実の世界。

さっきまで居た場所は何だっただろう。

あの家へ行く途中のどこかに日付変更線ならぬ、次元変更線でもあるのかもしれない。

そんな馬鹿馬鹿しい事を思う自分に呆れながら、ようやく玉城はあのバイトに取りかかることにした。

第4話 探る

あの絵の作者「M I S A K I」が来るまで見張る。
なんと非効率的な仕事だろう。

元より玉城はその人物の顔も知らないし性別さえも分からない。

ネットで検索してみても作品に対する評価的な情報は沢山あったものの、作者自身の情報はまるでない。

気の短い玉城はとにかく駄目モトでもいいからと画廊のオーナーを当たってみることにした。

画廊は平日の昼間だということもあってか客は一人もいなかった。
あの作者の絵も、もちろんない。小宮が買った一枚だけだったのだろう。

「ミサキ？」

ひよろりと背の高い画廊のオーナーは面倒くさそうに四角いメガネをずらしながら上目使いに玉城を見た。

「あの人の何を知りたいんです？先日も住所とか聞きに来た人がいますが

個人的情報は勘弁して貰えませんか。こつちも信頼関係、大事ですから」

見抜かれてる。玉城はドキリとした。

「絵に惹かれたから知りたいんです。あの女の子の絵、一目見て惹きつけられてしまいました。」

売れてしまつてがっかりなんです」

本心とウソを混ぜ合わせて食い下がる。とにかく早く仕事を終わらせたい。

効を成したかオーナーの目が少し柔らかく変化した。

「あの少女の絵は特に私も気に入りました。もう少し手元に置いておきたかったほどのです。」

彼は背景をあまり描かない人なんです、今回は見事に写實的に景色が描き込まれていたでしょう？

画風を変えたのかと聞いても、まあ、何も答えてくれませんでしたかね」

「長いお付き合いなんですか？」

「やっと最近です。彼をつかまえられたのは。」

画廊が生き残るには如何に新しい才能を見つけだし発掘するか、ですからね。粘りましたよ」

「人気あるんですか？」

「知らないんですか？」

オーナーはいぶかしげに玉城を見た。

「あ、・・・すいみません、疎くて」

正直に顔を赤らめる玉城に好感を持ったのか、オーナーはニコリとしました。

「彼は一度逃がしたら手に入らない。」

そつとしかないと、気を損ねてどこかに飛び去っていく鳥みたいなモンです。

そつと餌付けて、金の卵を産み落として貰わなきゃ」

「鳥・・・ですか」

芸術家と言うものはそんなに気難しいものなんだろうか。

ともかく、この調子では住所なんて聞けるはずもない。

玉城はオーナーの商魂たくましく計算高い笑いを見ながらそう思った。

結局「彼」であることしか分からなかった。

足取りも重く画廊を出た玉城は、向かいにテラスのあるコーヒーストップを見つけ、立ち寄った。少し救われた。ちょうどいい監視スペースだ。

明日からここで双眼鏡でも持ってバードウォッチングと行くか。玉城は一つ溜息をついた。

次の日も、その次の日も、その画廊に「MISAKI」は来なかった。

さすがに常に張り込んでいたわけではなかったが、彼のために開けてあるというあのスペースには何も飾られていなかった。

今日も日がな一日、向かいのテラスに座って玉城はまんじりと過ごした。

出版社からの仕事の話もさっぱりだ。グルメ月刊誌が廃刊になったのは仕方ないが

それでハイサヨナラとは冷たすぎる。

一緒に回ったフォトグラファーはすぐに別の仕事が付いたと知り、それも何だか気を滅入らせる。

フォトグラファー……。

あの偽フォトグラファーはどうしてるだろう。連絡もない。いや、そもそも彼が連絡をよこすことなんてあり得ない。そういうタイプでは絶対ない。

手は大丈夫だろうか。

そう思った瞬間、ナイフを落とした時の映像が浮かんできた。玉城は咄嗟に立ち上がる。

“ どうしよう……。まだ仕事出来ずに家にいたら……。 ”

ザワザワと胸騒ぎがして、玉城はセルフのトレーをあわてて片づけると

あの家を目指して足早に歩き出した。

風が動き出した。

朝から雲で覆われていた空はゆつくりと青空を覗かせ始め、ケヤキの緑の隙間からは心地よい木漏れ日が揺れる。

テラコッタの屋根。白いペンキの剥げかかったあの古い家が見え始めると

何故か心がゆつたりと落ち着いて行くのを感じた。

今、変更線を越えたのかもしれない。

辺りは小さな小鳥のさえずり以外は何も聞こえない。

多少罪悪感があったが、玉城は前と同じようにカーテンも何もかかっていないガラス窓から

中をそっと覗き込んだ。

雲の切れ目から差し込む光の筋がくつきりと部屋の中を照らし出し、中にいる人物を浮かび上がらせた。

ざっくりとした大きめの真っ白い半袖Ｔシャツとジーンズだけの姿で、

彼は斜め向こうを向いて立っていた。

左手は下に垂らし、右手をゆるく前方に付き出している。

右手首には白いサポーター。

けれど、玉城をドキリとさせたのはその先にあるものだった。

リクの手に緩く握られているのは筆。

そして、その先にはイーゼルに立てかけられた一枚の絵があった。

アングルこそ違うがそれは彼が交差点で惹きつけられ、小宮老人が不安そうに見せてくれた、

あの少女の絵だった。

第5話 展開

『そつとしかないと何処かに飛び去ってしまう、鳥みたいなもんです』

このドアを開けたら、あの嘘つき鳥は気を損ねて飛び去ってしまうだろうか。

玉城は年代を感じさせる真鍮のドアノブに手をかけた。

思った通り鍵などかかっていない。ドアはキイと微かな音を立てて開いた。

ハッとしてリクがこちらを向く。

ドアから飛び込んで来た光に眩しそうに目を細めた。

「鍵、かけないと。不用心だよ」

玉城はさりげなくそう言うのと部屋に入って行った。

こんな偶然があるだろうか。

そう思う反面、玉城は不思議と全てのピースが収まったようなくくりした気分だった。

「玉ちゃん以外に、そこから勝手に入ってくる人はいないよ」

リクは勝手に入ってきた玉城にほんの少し微笑みかけた。

初めて来た時に玉城が気がついたあの特殊な臭いの正体がこれだったのだ。

油絵の具のオイルの臭い。

リクはそれ以上玉城を気にとめるでもなく、ゆっくりと筆を動かした。

キャンバスの上では深い青を基調とした背景に、あの少女がやはり

寂しげな様子でたたずんでいる。

アングルが前と違うが、背景の雑木林の様子も、見え隠れする遠くの建物までリアルに描き込まれている。

実際にある場所なのか、想像上の景色なのか、玉城にはもちろん分からない。

「手、まだ痛む？」

聞きたいことがありすぎて、何から手を付けていいか分からない。

「平気」ぽそりと答えるリク。

取りあえずバードウォッチングの必要が無くなった事と、

借金から救われるであろう事の安心感で、玉城は開放感に満たされた。

それと同時に、目の前の、このつかみ所のない青年への興味が溢れてきた。

「絵描きさんなんじゃない。ピアニストでもフォトグラファーでもなく」

「そんなこと言った？」

「言った」

「絵は・・・ただの趣味だよ」

「それも嘘だよね。『MISAKI』さん」

その言葉にリクは一瞬手を止め、びっくりしたように玉城をじっと見た。

玉城はその表情が可笑しくて少し笑ってしまった。

「ああ、その画廊で同じ絵を偶然見かけてね。綺麗な絵だったんで注目してたんだ。」

まさかリクのだなんて」

「ああ・・・そう」

リクは少し笑ってまた手を動かし始めた。

「その絵の女の子は知り合いなの？綺麗な子だね」

“この絵の作者を見つけても決して自分から話しかけないでくださいね。”

心配して言ってくれた老人の言葉を思い出したが、まるでリクは危険な臭いはしない。

それどころか、なんとなく彼の側にいると気持ちが落ち着く。

玉城はわき上がってくる好奇心に任せて聞いてみた。

けれどリクは何も言わない。

「モデルとかいるの？それとも、ただ、イメージ？」

しつこくもう一度聞いてみた。

しばらくリクはじっとキャンバスを見つめていたが、やがてゆっくり首だけ玉城の方に向けて小さく言った。

「信じてくれる？」

「え？なに？」少しビクリする玉城。

「玉ちゃんなら、信じてくれるかな」

「だから、なにを？」

玉城は少しぼかんとしてリクを見つめた。

「彼女、とてもしつこいんだ。ほとんど毎日僕の所に来て、描いて欲しいって言う。」

他に行くとこないんだろうから、しかたないんだけど。」

「え？ここに来るの？いつ？昼間？」

玉城は思わず裏返った大きな声を出した。すぐに小宮に知らせてあ

げたい気分だった。

「早朝の時もあれば、深夜の時もある。・・・夜が多いかな。そんな時、僕は一晩中相手をさせられるんだ。僕の中に入ってきて寝させてもらえない」

玉城はシヨルダーバッグを落としそうになった。

「な・・・何の話してんだよ。17、8の女の子だよ？ そんなわけないでしょ。ジョーダンはいいから。・・・その子はどこに住んでるの？」

“俺をからかってるんだろうか。この男は”

玉城は少しばかり腹が立ってきた。

「住んでる所はわからない。体はもう無いから」

「・・・・・・・・・・は？」

「ここに来るのはいつも魂だけだから。その子の」

リクは玉城の目をじっと見ながら、何気ない会話を交わすような口調でさらりと言う。

そんな真っ直ぐな目で嘘をつく人間を玉城は知らない。けれど、とうてい信じられるわけもない。

いったい、この男は何を言い出すんだろう。また苛立ちが蘇ってきた。

「幽霊だつてこと？」

「そういう言い方のほうが近いかな」

「近いかな・・・て、それを信じろっていつの？」

「信じなくてもいいよ、別に」

リクは急に子供のようにムツとした顔をして、洗筆油に筆をポンと投げ入れた。

「玉ちゃんが聞くから答えたただだよ」

「そりゃそうだけど、普通むりでしょ。常識的にさ。笑えないし。俺、その手の話、だめなんだ。悪いけど」

リクはじつと真っ直ぐキャンバスを見つめたままだったが、やがて少しうつむいて、フツと自嘲気味に笑った。

「普通、とか、常識、とか、その手の話、とか……」

そして、ゆっくり玉城を見た。

「子供の頃からずっとそんな目で見られてきたからもう慣れてる。いいよ。」

でも、玉ちゃんにはあの子が見えるかと思ったんだけどな。・・何か、同じニオイがしたから」

「同じニオイ？俺は靈感とかまるで無いよ。変なこと言わないでくれって」

「それは玉ちゃんが気がつかないだけだろ？」

「どうしてそう言えるんだよ」

リクがあまりしつこく食い下がるので玉城も少しムキになってきた。

「だって玉ちゃん、見たじゃない」

「何を！」

「幽霊を。」

「何言ってるの。いつだよ」

「僕たちが出会った日だよ」

「は？あの日何を見たって言うんだよ」

「僕を追いかけてきたスーツの女、見たんでしょ？」

「スーツの女？そりゃあ見たよ。だけどそれがどうしたんだよ」

玉城は眉間に皺を寄せてリクを睨んだ。

しかし、すでに背中がゾクゾクし始めている。とてつもなく嫌な予感。

リクはニヤツと笑って玉城をチラリと見た。

「ほらね……玉ちゃんも見えるんじゃないか」

玉城の全身にぞぞぞつと悪寒が走り抜けていった。

「そ……そんな……あの女が？」

全身から今度はじわりと嫌な汗が出てきた。

けれどリクはもうその話に興味を失ったように前を向き、キャンバスに細い筆を走らせた。

絵の中の少女の栗色の髪に艶やかな光が宿る。

今にも何か語りかけて来そうな少女の唇、頬、瞳……

「……もう、その子は死んでるってこと？」

玉城は恐る恐る聞いてみた。

「そうだと思うよ。詳しい事情は何も聞かないから、彼女も何も答えないけど。」

僕は彼女が見せる映像をただそのまま描いてるだけ」

リクは抑揚のない声で言う。

そんな事ってあるだろうか。

玉城は混乱する頭を整理出来ずにいた。

少女は死んでいる。霊となって現れたところを描かれた。

どうやってそんな報告を小宮にすればいいのだろう。

いや、報告するべきなのかも疑問だ。知らない方が幸せだということもある。

「玉ちゃん」

考え込んでいるところを呼ばれ、玉城はビクリと跳ね上がった。

「え？」

「もう少しここに居てくれる？もうすぐ彼女、来ると思うんだ。一人じゃ怖いから、玉ちゃんも居てくれる？」

リクが真顔で玉城を見て言った。

「た・・・あつ・・・あの、いや、オレちょっとね、まだ仕事の途中なんだ。」

悪い！ごめんね。また来るから。がんばって！」

じりじり後ずさりする玉城。

今日は絵の道具やキャンバスが床に無造作に置いてあるのでそれらに何度も躓き、

転けそうになりながら玄関ドアまで辿り着くと“じゃあ！”と言って慌てたように外に飛び出して行った。

またシンと静まりかえる室内。

リクは玉城が飛び出して行ったドアを見つめながらほんの少し笑うと、

少し疲れたように目を伏せた。

第6話 嘘

とにかく玉城は混乱していた。

捕まえた「真実」は、いきなりとんでもない化け物に変化した。

けれどそれがどんな化け物でも依頼者である人物に届けなければ仕事として終了しない。

“『あなたの友人のお孫さんは死んでいました。

その絵に描かれてるのはそのお孫さんの幽霊です』”

・・・ありえない、あの坊主頭に袋だたきにされそうだ。

では、依頼通りリクの居場所を小宮に教えるだけにしたほうがいいのか。

でも、リクは何と思うだろう。俺を信頼して話してくれたのに。

小宮老人は彼の話信じてても信じていなくても、彼を疑うだろう。

悪くすればリクが少女に何らかの危害を加えたと勘違いするかもしれない。”

絡み始めた糸はさらにこんがらがって解けなくなりそうだった。

思い悩みながら玉城は何となく癖で、また画廊の向かいのコーヒーストップのテラスに腰掛けた。

取りあえず小宮に電話を入れてみる。

待ちわびていたのか、小宮はすぐに電話に出た。

「ああ、玉城さん。連絡が無いので心配していました。どうですか？」

不安そうな小宮の声に罪悪感を覚える玉城。

「すみません。画廊にはまだ彼は現れなくて」

嘘はついていない。

「そうですか。申し訳ないが、もう少しがんばってください」

「はい。……あの……」

「はい？」

「あの絵の作者が見つかったらどうするんですか？」

「それは前にお話したように、あの絵の女の子と私たちが捜す女の子と同じ人物かを確かめて、もしそうならば居場所を知っているか尋ねるだけです。それだけです」

「そうですよね。……その娘さん、元気だいいですね」

言った後、自分は大バカだと玉城は落ち込んだ。

「そうですね。それを願うばかりです」

心なしか、小宮の声が少し震えているような気がして玉城は居たたまれなくなった。

「あ、玉城さん！」

「……はい？」

「どうか、その人物に会っても話しかけたりしないでくださいね。絶対に。」

もし危険な人物だったら何をされるか分かりませんから」

前にも聞いた言葉を繰り返す小宮。心配性なのだろうか。

だが、玉城はその気遣いにジンとした。

自分はすべて知っているとこの罪悪感が胸を締め付ける。

八方塞がりだった。いったい、どうするのが最善なのだろう。

電話を切り、途方に暮れる玉城。ただ椅子にもたれてボーッと向かいの画廊を見つめていた。

と、その時。

見覚えのあるスーツ姿を玉城の目は捉えた。

「ん???」

ベージュのスーツ。黒く長い髪を後ろで束ねたキャリアウーマン風の気の強そうな女性。

見覚えがあるというものではない。

あの女は・・・!!

「あああああつつつつーーーーー!!」

真っ昼間の人通りの多い大通りで玉城は道を挟んだ向かい側のその女性を指して大声を出した。

玉城の頭の中は大パニックだ。

驚いたことに、それに気付いた女の表情も見見る変わり、眉と目をつり上げながら車道を通り切り、こちらにズンズンと歩いてきた。

“ どういうこと? ”

女は更に怖い顔つきで玉城のすぐ側まで靴音を響かせながら近づくと、

仁王立ちしたまま言った。

「 あんた、弁護士なの? 」

「は???」 目が点になる玉城。

「べ・・・弁護士って何です?」

しどろもどろになりながら玉城は女を見上げた。なんと玉城よりもでかい。

殴り合いをしたら確実に負けそうだと思った。

「やっぱり嘘なのね! まあ、そんなことだろうと思ったけど。・・・で? あんたは?

リクに私のこと何て紹介されたわけ?」

凄まじい迫力に、玉城は小さな子供のように縮こまって答えた。バカ正直に。

「しつこく追いかけてくる・・・幽霊」

仁王立ちしたまま女は見る見る顔を赤らめ、しまいにはダンダンダンと足を踏みならした。

「今度会ったらブツ殺す!!」

もう玉城は今すぐにでも逃げ出したい気分だった。

「い、いや・・・そんな、物騒な。落ち着いてください。」

「落ち着いて下さいじゃ無いわよ! あんたもバカじゃない?

なんでそんな嘘を簡単に信じちゃうのさ。あいつの目を見たら分かるでしょ?

人を小馬鹿にして世間を舐めて、本当の事なんて何一つしゃべろうとしない。

それともあんたの目は節穴なの? そんなんじゃ、いつか詐欺にでも引っかかるわよ。」

初対面でこんなに罵倒されたのは初めてだった。玉城は泣けてきた。そして、かなりの的を得ている。詐欺にはもう、引っかかった。

「あ……。嘘……。なんですね？」

「当たり前じゃない。どこの世界にこんなハッキリした幽霊がいるのよ。」

あの男はね、嘘しか言えないの。根性ねじ曲がってるんだから。だからまともに人と接することも交わることもできない。自業自得よ。

いい？あいつがしゃべることは何一つ信用しちゃだめよ。

ちよつとでも信用して痛い目に合った人間は山ほどいるんだから」

「あの……。あなたは？」

「私？」

女はやつと少し我に返ったように一つ深呼吸すると、ゴソゴソとバツグの中を探り

一枚の名刺を取り出した。

「私は美術誌『グリッド』の編集部部長、長谷川と言います」

「グリッド？グリッドって言ったら大東和出版の？僕、グルメ誌でお世話になったことがあるんです」

玉城も慌てて名刺を取り出す。

「へえ、ライターさんなんだ」

長谷川は興味深そうに玉城を上から下まで見回した。

「あの……。長谷川さん、なんで僕を弁護士だと思ったんですか？」

「リクが言ったのよ。あまりしつこく追い回すなら知り合いの有能な弁護士に介入して貰う。」

あなたをストーカーに仕立て上げるのなんて簡単だって。

ふざけんなってのよ、まったく！」

「まさか……。そんな酷いことを？」

「私はただ密着取材させてくれって言っただけなのよ。それも、あいつは一回OKして契約くれた。こっちだってそのつもりで計画してんのに。」

その時の記者が気に入らなかったのか知らないけど、いきなり白紙に戻されちゃってさ。

穴を開けられて訴えたいのはこっちだわよ!!」

長谷川は鼻息を荒げて玉城に詰め寄った。

「いい？あいつは大嘘つきなの。少しでも信用したらバカを見るわよ！」

それだけ言うのが晴れたのか、長谷川はくるりと向きを変え、また車道を無理矢理突っ切ってドスドスと反対側へ渡り、あの画廊の中に消えていった。

「・・・あのオーナーに彼のこと聞いても無駄なのに」
玉城はぼつりと独り言を言ってみた。

そして、何か決心したようにゆっくり立ち上がる。

さっきまでの迷いはその表情には無かった。

少し怒りを含んだその目は、真っ直ぐあの路地に向けられた。

思えば『騙される』事から始まったように思う彼のこのところの不運。

自分の都合や私欲のために平気で人を騙す人間に辟易していた。そんな人間は心にきつと闇を持っている。

小さな嘘を平気で重ねる人間は、大きな嘘も平気で隠し通そうとする。

玉城はあの家に向かった。

空は次第に雲に覆われ初めていた。

まだ日没にはほど遠い時間だというのに、どんより薄暗い。

ケヤキの木がザワザワと、陰口を言うように乾いた葉音を立てた。

“もう一度真実を聞いてみよう”

その一心であの家を目指した。

家が見えてきた。けれど、その遙か手前で玉城は慌てて太いケヤキの影に隠れた。

ちようどリクが家の中から出てきたのだ。

薄地のウインドブレーカーを羽織り、手には白い手袋をただけで、何も持っていない。

気乗りのしないお使いを頼まれたような表情をして、

リクは玉城が来たのとは反対方向へ向かって歩き出した。

何処へ行くのだろう。

負の興味が沸いてきた。

玉城は充分距離を取り、気付かれないようにそつと後をつけた。

どこまで行く気だろう。もう随分歩いた。

玉城は無秩序に木々が生えている遊歩道を歩きながら少し不安になつてきた。

自分はただこいつの気まぐれな散歩に付き合わされているだけなの

だろうか、と。

たぶん、開発計画が途中で止まってしまっている場所なのだろう。繁華街からそんなに離れていないと言うのに、その一帯は広範囲に渡って人の手が入っていない雑木林だった。

しかし、この景色は何処かで見た覚えがある。

玉城は、遙か前方を何の躊躇いもなく道を選択して歩くリクの背中を見つめながら考えた。

もう、新緑の季節だというのにここの白茶けた木々はまるで冬の林のように葉を付けていない。

枯れてしまっているのかもしれない。

一見何処にでもある雑木林。

けれど、街から遠く離れていないために、鉄塔やビルの一部が見え隠れする。

そのアングルも見覚えがある。

この景色は……。

柔らかそうな土が微かに盛り上がっている一角でリクは足を止めた。

“ そうだ、思い出した ”

玉城は静かに太めの枯れ木に身を隠した。

“ あの絵の背景の雑木林だ！ ”

一つパズルのピースがはまったような気分だったが、その先が読めない。

何か意味のある絵が浮かんでくるのだろうか。

リクは少し警戒するように辺りをキョロキョロ見渡した後、すぐ近くの木にそっと立てかけてあった錆び付いた小さなシヨベルを手に取った。

前回来たときに置いて行っただけと言う感じだ。

シヨベルを持ったまま彼は足元の少し盛り上がったやわらかい腐葉土を見おろした。

“ 何をするつもりだろう ”

息を殺して見続ける玉城。

リクはゆっくりとシヨベルでその土を掘り始めた。

そこは以前に深く掘進められていたのだろう。

朽ちた枯れ葉が乗せてあるだけで難なく50センチくらいはすぐに掘り返せたようだ。

けれどある瞬間、土がガツと硬い音を立てた。

少し驚いた仕草をしたが、リクはそのまま土を掘り返し始めた。

“ いったい何をやってるんだろう ”

そう心の中で自問してみるが、玉城の本心はある妄想に取り付かれて身動き出来なくなっていた。

行方不明の少女の絵。

少女はもうこの世に居ないと仄めかし、

少女の背景に描かれた景色と酷似した場所を掘り返す男。

不気味な音を立ててピースがはめ込まれていく。

ゆっくり完成系に近づきつつあった。

気温が急に下がった気がした。

リクは大きな土の塊をガバツと掻き上げ少し足を取られそうになる。けれど何とか体制を整えた彼は、その穴の中を静かに見おろしたまま固まったように動かなくなった。

手にしていたショベルをぽとりと落とし、吸い付けられるようにその穴の中を見ている。

玉城の位置からではその表情までは分からない。

思わず体を前のめりにして後方からリクの掘り起こした土の中を覗き込んだ。

薄暗い上に遠くて見えづらかったが、朽ちかけた薄茶の布キレに絡まるように見えた白い物体は明らかに木の枝や根つこではなかった。

本物など玉城にしても見たことは無かったが、けれどもそれが何なのかは分かる。

人の手だ。

よく肥えた大地に取り込まれ、すっかり露わにされてしまった人間の骨だった。

第7話 拒絶

無意識に一步踏み出した玉城の足の下で、乾いた小枝がパキッと小さな音を立てた。

まるで銃声に驚いた小動物のようにピクリと反応してリクは真っ直ぐ玉城の方を見た。

その目は見開かれ、顔は天候のせいだろうか、ひどく青白い。

玉城は構わずゆっくりとリクの方へ歩み寄った。

自分でも驚くほど冷静だった。

怒りが頂点に来ると人は逆に冷静になれるのかも知れない。そう思った。

「手、そんなに使っても痛くないのか？いや、それだって嘘だったのかもな」

トーンの低い、冷やかな声をリクに向けた。

「でもね、許される嘘とそうじゃない嘘がある」

玉城が一步、また一步と近づくに連れ、リクも少しずつ後ろに下がる。

「俺はあんたのせいで人を信用出来なくなるかも知れない」

リクの方に近づくに従い、穴の中の物は嫌でも目に飛び込んでくる。堪えようのない嫌悪感、吐き気が目の前の青年への怒りとなって押し寄せた。

「あんたがこんな酷いことする人間だとは思わなかった。見抜けなかった自分にもがっかりだ」

玉城がそう言うときリクは後ずさりしながらゆっくりと首を横に振っ

た。

怯えた目。顔色はますます青ざめていった。

「・・・ちがう、僕じゃない。ちがう」

リクはか細く小さな声で反論した。

「もういいよ。もう君の嘘は何一つ聞きたくない。

よくもあんな嘘をつけたもんだよね。長谷川さんはちゃんと実在する女性だったよ。

幽霊だ？ほんと、笑うよ。信じた俺も相当マヌケだけど。

ねえ。後で笑ってたんでしょ。あいつはすぐに騙されるバカな奴だつて」

怒りがまた別の方向に沸き立ってきた。けれどももう、止まらなかった。

リクは小さな子供がするように、今にも泣き出しそうに顔を歪ませた。

「ごめん。・・・悪気はなかったんだ。でも・・・」

「でも、何？悪気が無かったら何してもいいわけ？人を殺して埋めて、嘘で誤魔化してもいいわけ？」

「違う！この子は違うんだ。信じて！ぼくじゃない！」

「もう信じない。君の言うことは、何も信じない！」

「・・・玉ちゃん・・・」

消え入りそうな声でつぶやくと、リクは一步、また後ろに下がる。

“通じると思ったのに”

玉城はもう近寄るのをやめてじっとリクを見据えた。

“うち解けてもいい奴かもしれないと思ったのに。”

裏切られた思いが玉城の心にどす黒い渦を巻いた。

「あんたみたいに平気で人を騙す奴は大嫌いなんだよ！」
大声を出したとたん、近くにいたらしいキジバトが驚いてバサバサと羽音を立てて飛び去った。

玉城の顔をじっと見つめた後、一瞬辛そうに視線を伏せ、リクはくるりと背を向けて走り出した。
勾配の急な斜面を駆け下り、その姿はあっという間に見えなくなってしまった。

玉城は追うでもなく、ただじっとその方向を見つめていた。
その穴はすぐ足元にあったが、二度と見ることは出来なかった。
普通の状態ならきつと叫び声を上げて逃げ出していたに違いない。
けれども今はまだ怖さより、怒りの方が勝っていた。

ゆっくりとその場を離れながら、玉城は携帯を取り出した。
そして小宮の番号を押す。

すぐに老人は出てきた。

「連絡が遅くなってすみません。・・・ええ、見つけました。あの絵を描いた男を」

やけに気持ちが落ち着かない。

スツキリしないまま玉城は来た道を倍の時間をかけてだらだらと戻った。

老人は泣いて礼を言ってきた。あの子が見つかるかもしれないと喜んで。

玉城は『彼に会うなら警察と一緒に』とだけ付け加えた。
どうしてかと聞く小宮に玉城は何も答えられず、電話を切った。

電源もOFFにする。

もうこの事件には一切関わりなくなかった。
警察が介入すればいずれ少女の体も発見されるだろう。全て終わった。

この数日間は、記憶から消そう。

“ いいよ、別に。信じてくれなくても ”

不意にリクの子供のような、拗ねた声が頭をよぎった。
うち消すように頭をブンと振る。

来た道を辿れば必然とあの家の前に辿り着く。

老人はどうしただろう。電話をしてからもう40分以上経っている。
警察を呼んだのだろうか。それなら家の周りは騒然としているはずだ。

緩い勾配のカーブした坂道を下る。

次第にあの家が見えてきた。

予想に反してその家の周りはシンと静まりかえっていた。

リクは何処かに逃げてしまったのだろうか。それとも老人はまだのんびり準備しているのだろうか。

あまりにも静かだ。異様なまでに。世の中から音が消えてしまったかのように。

ドアの前まで来てしまった玉城は、その異様な静けさに恐怖すら感じた。

いや、恐怖は静けさのせいでは無かった。

静寂の中に微かに聞こえる声。すすり泣くような声。リクのではない。

誰か居るのか？

窓から覗くことも忘れ、引き込まれるように玉城はドアノブを引いた。

鍵など掛かっていない。いつものように。

けれどそこで見た光景は今まで見たことのない、異様なものだった。

床にひっくり返ったバケツ、散らばった絵の具と白いままのキャンバス、

引き倒された椅子、割れたコップ、皿、ナイフ、床に付いた幾つもの靴痕、転がった角材。

まるで部屋に迷い込んだ一匹の野ウサギを捕まえるために、大捕物をした後のような惨状だった。

そして、・・・その部屋の隅に白くぼうつと浮かび上がり、うずくまっている人影。

微かな声を出して泣いているのはその人影だった。

「・・・・・・・・」

玉城は“それ”が何か、すぐに分かった。

けれど頭は全力を挙げて否定しようとしている。

そんなバカなものが、目の前にあるわけがない。

恐怖と相まって、心が悲鳴を上げそうになる。

その少女はゆっくりと玉城の方を向いた。

もう、否定のしようがない。

何度も何度も見てきた、あの絵の少女だった。

少女は青ざめて固まっている玉城の目をじっと見てつぶやいた。

「・・・どうして？」

涙を流しているその頬も、白く細い手も体も首も、光の残像のようにぼんやり向こう側が透けている。

少女はさらに繰り返す。

「どうして信じてあげなかったの？ リクはあなたを信じたのに」

“リク・・・”

玉城はハッと我に返る。けれど声が出てこない。

「わたし、わがまま言った。リクはすごく怖かったと思う。でも、優しいから、お願い聞いて探しに行ってくれたのよ。わたしの体を」

「・・・」

やはり声が出ない。だが少女の声はともクリアに聞こえる。

「リクはね、恐がりなの。何度私が来たってその度に怖がる。でも受け入れてくれた。やさしいから。だから彼の周りには寂しい魂が集まる・・・。」

玉城は混乱していた。

「私のせいよね。ごめんね・・・リク」

けれどもただ一つ、はつきりと分かることがあった。

「あの男に見つかっちゃった・・・。私を殺して埋めた、あの男に・

・
「

自分は、取り返しのつかない間違いを犯した。

第8話 サヨナラ

「リク……。連れて行かれちゃった」

少女の声は耳ではなく脳に痛いほど響いてくる。

玉城は改めて、ひどく荒らされた部屋をぐるりと見渡した。
心臓が苦しい。

目の前にいる、常識では考えられない少女を怖いと思う余裕はなくなっていた。

ただあるのは自分へのどうしようもない怒り。

玉城はその家を飛び出した。

まだ間に合うだろうか。まだ？・・・何に？

走りながら携帯の電源を入れる。

思った通り小宮から慌てたように何件もの着信が入っていた。
当然だ。玉城は警察というキーワードを出したのだから。

あの絵の作者から何か聞いてしまったと思うのが妥当だろう。

頭の中では回路がフルスピードでパズルを再度組み立て始めていた。

少女を殺したのはあの小宮だ。

そして小宮はある日、その少女とそっくりな絵を見つける。

他人のそら似であるはずがなかった。

背景には少女を埋めた場所が克明に描かれていたのだから。

まさか、見られていたのだろうかと慌てる。描いたのは誰だ？

自分や近いものが偵察に回ると足がつく。誰か適当な人間に探さ

せよう。

その絵を描いた人物を。

頭がズンと重かった。

そう言えば、最初あの家に入ったときもそうだったのを玉城は思いだした。

自分は“そういうタイプ”の人間だったのだろうか。

リクにはそれが分かったのかもしれない。

彼の「真実」はあまりにも他人に受け入れにくい。

これまでどれだけ辻褄の合わない言動で人に眉をひそめられたのだろう。

次第にいろんな事を嘘で誤魔化すようになったとしても誰が責められるだろう。

彼はずっと嘘と真実の狭間を一人で生きてきたのだ。

玉城はそんな彼に罵声を浴びせた自分が憎くて堪らなかった。

大通りに出てタクシーをつかまえ、あの街金の事務所へ向かった。店舗の方は営業時間だというのにしっかりシャッターが閉まっている。

リクがそこに居ることを願いつつ玉城は一度通された事のある事務所裏口に回った。

薄汚れたドアから中に入ると、ごちゃごちゃとダンボールの積み重ねた通路の向こうの部屋に明かりが見える。

窓がなく、外からの光は一切入らない。

そのため上半分がガラス張りの扉から中の様子がよく見える。

そっと覗くと、どうやら中に居るのは前に店にいた坊主頭の男だけ

だった。

扉に背を向けて携帯で誰かと話している。

小宮はいない。リクはここに連れてこられたのではないのだろうか。不安に駆られながら、玉城はその男の会話に耳をすませた。

「・・・ええ。間違いないですね。俺の顔を見てビックリしてましたから。」

・・・だとしたら埋める時しか考えられませんがね。

なんであの子の顔を知ってたのかが分からのですが。・・・ああ、先に聞いたときや良かったですか？

とにかく車の手配頼みますよ小宮さん。トランクの大きな奴。なるべく急いで」

坊主頭は何が可笑しいのか時々笑いながら話している。

笑える材料は何もない。

玉城の胃が吐き気を伴って痛み始めた。

最悪の想像を全力でうち消そうとしてみる。

けれどさらに動悸は激しくなり手足は冷え、吐き気が増してくる。

坊主頭は向こうを向いたままだ。

玉城はさらに近づいて部屋の中を覗き込んだ。

ダンボールや緩衝材、カップラーメンのゴミやビールの空き缶などが散乱した汚い部屋だった。

やはり、他に人がいるようすはない。

だが坊主頭の口振りでは、彼が誰かを見張ってる風に聞こえた。見張る必要があるのかどうか・・・は別として。

さらに床の辺りを覗き込んでみた。

その瞬間、玉城は背中に電気を流されたように体を震わせた。

人がいる。

事務机の下に横たわっている。

肩から上しか見えない。しかも向こうむきに俯せになっているので顔はわからない。

けれどあの特徴のあるくせっ毛。

玉城の心臓がドクドクと大きな音を立てはじめた。体中が痺れている。

動かない。横たわる体は少しも動かない。

体はさらに冷えていくのに嫌な汗がじっとり全身を覆う。

“助けなければ・・・でも、どうやって。”

そうだ、電話。

玉城は震える指でここの店舗の番号を押した。

店の方で電話がコールを始める。かなり音量が大きく設定されているらしくフロア中に響いた。

坊主頭はそれに気付いて面倒くさそうにいったん部屋を出ると店の方に歩いていった。

しばらくして玉城の携帯に坊主頭の声。

「はい、グリーンライフローン」

「あ・・・玉城です」

「ああ、先程はどうも。社長があなたを探していましたよ？今どこに？」

少し声が警戒を含んでいる。

「それなんです、大切なお話があります。今すぐあの画廊の向かいのコーヒーストップまで」

来て貰えませんか？5分以内に」

「今から？」

「はい。あなた達にとって大切な話です」

かなり含みを持たせた言い方をしてみた。

坊主頭の息を呑む音。

玉城にはうまくいく確信があった。

坊主頭は少し慌てた様子で携帯に連絡を入れるとバタバタと裏口から外に出てガチャリと鍵をかけた。

激しいバイクのエンジン音がしばらくして聞こえてきたが、そのあとは嘘のように静まりかえった。

時間はない。

玉城は急いで目の前の部屋に滑り込んだ。

机の下に、彼は横たわっていた。

うつぶせ気味の横顔は青白く、唇も、閉じた瞼もピクリともしない。玉城の鼓動は更に激しくなる。

「リク・・・」

呼んでも反応がない。もう玉城は泣きそうだった。

恐る恐るその肩に、震える手を伸ばす。

“その肩が冷たかったらどうしよう”

最悪な想像ばかりが頭の中をいっぱいにし、更に体が痺れていく。

まさに玉城の指がその肩に触れそうになった、その瞬間。

その体がぐらりと揺れ、玉城の出した手をリクの手が力強く掴んだ。

「ぐっ、あっ！！！」

心臓が縮み上がり玉城は思わず声にならない叫び声を出した。
その反動で後ろに反り返り、壁にしたたか頭を打ち付ける。

「くっ・・・ふふふ」

玉城の手を掴んだまま、リクは堪えきれないように体を折り曲げて
床の上で笑い出した。

「え・・・、あ・・・？えええええっ??」

声にならない玉城。口をぽかんと開けたまま、可笑しそうに笑って
いるリクを呆然と見つめた。

「ごめんごめんごめん。そんなに驚くとは思わなかった」

リクはゆっくりと起きあがり、逆に壁に妙な格好で貼り付いている
玉城を助け起す。

そして言葉が出てこない玉城に顔を近づけてニコリと笑った。

「来てくれたんだね。ありがとう、玉ちゃん」

小さな子供が喧嘩の後、仲直りする時に照れて笑う。そんな笑顔だ
った。

「・・・リク・・・」

涙声の玉城に、またクスクス笑うリク。

「リク・・・俺・・・あの・・・」

「もういいから。さあ、行くよ」

玉城の言葉を遮り、リクはその腕を掴むと立ち上がった。

「あ・・・うん」

いったいどちらが助けに来たのか分からない。

二人は急いで部屋を抜け出すと、さつき坊主頭が出ていった裏口から難なく外へ飛び出した。

遠くからバイクの音がする。一瞬二人は体を強ばらせたが別のバイクだった。

「こつち」

ホツとする暇もなく大通りと反対方向へ二人は路地を抜けて走った。レトロで洋風なイメージのある大通りから筋を二つ三つ入れればもう、古びた雑居ビルや飲み屋が並ぶ商店街だ。

リクは時折玉城を振り返りながらも、何処までも走り続けた。

いい加減心臓が持たないと思った玉城はリクを呼び止めた。

もう、ここからはタクシーで逃げよう、と。

リクは息を弾ませながらやっと立ち止まり辺りを見渡している。

綺麗に整備された並木道。商店街。遠くにはポリボックスも見える。

ああ、本当だね、とリクは笑った。

大きく息を吸い込み、そしてゆっくり吐き出す。

「本当に、大丈夫だった？何かされてない？」

まだ息を弾ませながら玉城が心配そうにリクに聞いた。

「うん、平気。クロロホルムだから」

「え？・・・クロロホルム？」

「ドラマの見過ぎなんだよ。知ってる？あんなの全然効果ないんだ。実験の力エルだって眠らせられない。本当に気絶させようと思ったら10分以上はかかるんだよ。実用的じゃないよね」

「え？そうなの？」

「うん。でも気を失ったふりしてたけど」

リクはほんの少し笑った。

「僕、嘘つくの得意だから」

玉城の心臓がドキンとした。

「リク、ごめん・・・おれ・・・」

「もういいって言っただろ」また遮る。

「僕、楽しかったよ。玉ちゃんに会えて」

「え？」

「初めてだったよ。通じるって思った人」

「・・・」

「ありがとう。来てくれて嬉しかった。やっぱり玉ちゃん、いい人だったよ」

リクはニツコリと笑って続けた。

「でもここでバイバイしよう。元気だね」

「え？・・・いや、送るよ」

突然のその言葉に玉城は慌てた。

「いいよ。もう、あの家には帰らない」

「帰らない？」

「バイバイ、玉ちゃん」

そう言うリクはくるりと背を向けて足早に歩き出した。もう振り向きもしない。

並木の間をするりと抜けて、もうその影はすぐに見えなくなった。あっけないくらいに。

けれど追うことも出来ない。

きっぱりと差し出されたサヨナラ。

玉城は息を思い切り吸い込み、力一杯声を振り絞った。

「リク！ あの女の子に遭ったんだ！ 君の言ったこと全部本当だった！
全部正しかった。俺は……俺は全然いい人なんかじゃない！！」

最後は声が詰まって消え入りそうに小さくなってしまった。
道行く人が不思議そうに玉城を見て通り過ぎていく。

けれどそんな事はどうでもよかった。

ただ、リクに届けばいい。そう思った。

『そつとしかないと、すぐに何処かに飛び去っていく鳥みたいなもんですよ』

バサバサと羽音が聞こえた気がした。
嘘について身を守ってきた臆病な鳥。

“俺は、勝手にテリトリーを犯した。”

第9話 越える

警察には匿名で通報した。

散歩の途中偶然に人骨らしいものを発見したと。それだけ言って電話を切った。

日本の警察は優秀だった。

すぐにそれはニュースになり、あの街金の老人と部下に繋がった。少女はその遠縁に当たる子供で、身寄りを亡くしてあのビルに身を寄せていたらしい。

どうして殺されたかは取調中だと報じられたが、玉城はそんな事知りたくもなかった。

日本の報道は知らなくていいことまで伝えすぎる。

本当に知らないやいけないことは置き去りにされる。

玉城はTVを消して携帯のメールを確認すると、マンションを出た。気持ちのいい快晴だ。

あれから1週間。

あの日を境に呪縛が解けたようにポツポツと仕事が舞い込んできている。

契約しておいた事務所との相性が良かったのかもしれない。

とは言っても仕事動き出すのはもう少し先であり、当面は良くも悪くも本当のフリーだった。

ぶらりと路面電車に乗ってみる。

ヨーロッパ調にデザインされた賑やかな大通りに差しかかり、あの画廊の横を滑り抜ける。

「・・・・あ」

思わず声を出し、玉城は降車ブザーを押す。

“あの場所”に見覚えのあるタッチの美しい色彩があった。

息を切らせて玉城は画廊にたどり着くと、ガラス窓に貼り付いた。

そこにはあの独特の光に溶けるような色づかいの美しい絵があった。
翼を今まさに広げて飛び立とうとしている真っ白い水鳥。

繊細でガラス細工のようだが凜とした気迫。

絵の隅には小さく「MISAKI」と書かれてあった。

リクはまだ居るのかもしれない。あの家で、まだ描いてるのかもしれない。

心臓がドクンと大きく疼いた。

息が苦しくなるほど走った。

公園を抜け、緩い勾配のあるケヤキの坂をのぼる。

ザワザワと風が抜けて行った。

テラコッタの屋根。白い壁。あの古い家が見えてきた。

息を切らせて扉を開けた。

窓からそっと覗くこともノックすることもせずに。

彼なら怒らずに、少し呆れたように笑って許してくれるに違いない。

けれど、何もなかった。

そこはガランとした、ただの古びた部屋だった。

テーブルも椅子も少しばかりの生活用品も、そのままそこに残されていたが、

まるで生活感の感じられない空き屋と化していた。

胸が苦しくなった。

ぐるりと部屋を見渡す。

奥にある小部屋のドアが開かれたままになっている。

キャンバスや絵の道具がいくつか残されたままになっていた。

初めて会ったときにここに運んだ荷物。あれはキャンバスだったんだと今更気がつく。

・・・込み上げてくるのは何だろう。ぽっかりと穴の開いたような虚脱感。・・・

ふと、パイン材のテーブルの上に何か置いてあるのに気がついた。メモのようだ。

ゆっくり近づいて手に取ってみた。

「探さないでください」

玉城は思わずクスツと笑った。

いったい誰に宛てて書いたものなのか。

友達だろうか、それとも大家？

子供の落書きのような字だった。

そのメモをじっと見つめて玉城は独り言のようにつぶやいた。

「ちゃんと謝ってないのに、ずるいよ」

そして溜息をつく。

「会いに行く？」

声がした。

「え？」慌てて周りをぐるりと見渡す。

「彼のところに連れて行こうか？」

あの少女が机の端に座ってこっちを見ている。

「探さないでつて書いてあるよ」

玉城は少しだけ笑って見せた。もう、恐怖心などない。自分もとくに境界線を越えたのだと思った。

「リクはね、嘘つきなのよ。知ってるでしょ？」
少女がニツコリ笑った。

「うん、知ってる」

玉城も笑い返す。

「あなたに書いたのよ。ずっと悩んで、それだけ書いた」

「・・・・・・」

突然玉城の携帯が鳴った。

着信を見たが、知らない番号だ。少し警戒して電話に出てみた。

「・・・はい」

「あ、玉城さん？玉城さんね？」

聞き覚えのある、太く力強い女性の声が響いてきた。

「あ・・・長谷川さん？」

「そう。覚えててくれてありがとう。突然だけど、あなた今、暇？」

「ひまつ・・・て、何なんですか、いきなり」

「仕事の依頼よ。あなたライターでしょ？」

「はい！仕事・・・ですか？」

「あいつの記事を書きたいのよ。今度こそちゃんと。上司がノリノリでね」

「あいつ？」

「リクよ！ミサキ・リク。あなた彼が何処にいるか知ってるんでしょ？親しそうだったし。」

彼の作品が今絵画愛好者の間で話題になってるのよ。これを逃す手はないわ。

彼には一度了解を得てるんだし、あなただったら断らないと思うのよ。

正式に依頼するから。引き受けてくれるわよね」

「・・・ぼくが追いかけるんですか？」

「嫌なの？」

「いえ・・・」

玉城は側でじっと小首をかしげてこつちをみている少女をちらりと見た。

につこりと笑う少女。

玉城は安心して一つ息を吸い込んだ。

「はい。依頼をお受けします」

電話を切ると玉城はもう一度少女を見た。
思わせぶりに少女はフワリとスカートを揺らす。

「そうね、教えてあげてもいいけど、一つお願い聞いてくれる？」
「おねがい？」

「そう。青いリンゴ、ほしいな。ちゃんと綺麗に剥いたのが。」

「あ・・・青いリンゴ？」

「うん、だめ？」

少女は少し心配そうに玉城を見つめる。

玉城は思いだした。

あの日の、青リンゴ。

「ああ・・・そうか」

玉城はクスクスと笑い出した。

そして、どうしようもなくリクに会いたくて仕方なくなった。

「ああ、いいよ。何個でも剥いてあげる。だから教えてくれる？リク
クの居るところ」

うそつきで、臆病で、へそ曲がりな、やさしい鳥に。
どうしようもなく、会いたくなった。

(END)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770g/>

RIKU

2011年10月5日11時45分発行